〔都林泉名勝圖會一坤〕四條祇園橋とて、昔は三條五條に等く官橋也、〇中略洪水にて損じぬれば、後世假橋にてゆきゝをわたす、河原廣くして、觀物貨食茶廊多し、特にみな月半、祇園の夕涼に美艶を粧ふ風姿のゆきゝ、万燈水の流に輝き河原表の壯觀、みな平天下の謳歌なるべし、

四條橋　　栲亭

月照紅樓隱翠楊、徘徊倚檻夜如霜、蛾眉長袖青絲騎、箇箇寫成影也忙、

賀茂川の西岸に榻を下して　　蕪村

丈山の口が過たり夕すゞみ

四條納涼　　定雅

涼しさや群集の中に水の月

同じく　　涙花才嬌

夕涼夜の都のにしきかな

〔都のにぎはひ跋〕平けく安らけき大御代の御惠は、いゆき到らぬ隈しなければ、絶にし物ども、繼て興され、廢れにし事どもをも古にかへさるゝ中、今の大御世をうれしみ辱なみ、絶て久しく成ぬる四條大路の橋を樹渡さまく、祇園社の氏子の人々の思よりて、其よし公に請ぬぎまをしかば、ねぎしまに〳〵許し給ひ命せ賜ひて、かく成竟つるは、いともめでたく貴き言葉になも有ける、かくてぞ都のすがたも取よろひて、足ひにける、されば大神も阿那めでたあなおむかしと、めで賜ひ悅びたまひ、氏子の人等も常にまうづる道の妨なく何の煩なく、今より後は加茂の水絶る事なく、石の柱のすたることなく、天地のむた遠長く、彌次々に造繼もてゆかむ末の世人も、今の大御世の德化を仰がざらめや、いそしみ成しつる人の功績をたゝへざらめや、

安政四年四月　　美濃守六人部宿禰是香